逆転発想 和紙糸生む

備後撚糸
福山市芦田町

水含ませて滑らかに

一見すると普通の糸だが、触ると滑らかさが伝わってくる。この糸、実は和紙でできている。撚糸（ねんし）業者の伝統技術を改良して生み出した「和紙糸」。紙は水に弱いという先入観を捨て、水分を含ませた和紙を糸に加工する―。逆転の発想から生まれた技が今、繊維業界で脚光を浴びる。

幅約一ミリ―三十ミリのテープ状和紙が材料だ。特殊な溶液に数時間浸した和紙を、独自の撚糸機で引っ張り上げながらねじり、糸に仕上げる。水分を含ませ加工するので表面が丸くなじみ、けば立たない。綿糸に比べ約三割軽く、吸水性や通気性にも優れるという。

「和紙と糸の組み合わせの意外性と機能性が受け、サンプルの注文が相次いでいる」と光成猛社長（64）。既にタオルやカーディガンなどへの製品化が進む。一年半をかけて二〇〇四年秋に開発した「水より製法」。オンリーワンの証しを得るべく特許出願中である。

独自製法は苦境の中で生まれた。創業以来、織布、縫製業者から撚糸を受注し繊維産業の初期工程を担ってきた。一九九〇年代前半、不況に直撃される。生産拠点を中国に移す元請けも相次ぎ、受注が減った。七〇年代前半に四百社に上った県内の同業者は〇三年には約三十社に激減。「業界の灯を消すまい」と光成社長は、前例のない技の開発を模索した。

そんな折、紙製手提げ袋の取っ手の注文が舞い込んだ。「もっと滑らかにできないか」。光成社長は当時、糸素材ではマイナーだった和紙に着目した。そのままよった和紙は太さにむらができ、切れやすく装飾など用途は限られていた。水分を含ませれば、むらを解消できるかもしれない―。紙は水に弱いという常識を覆す挑戦だった。

命題は、湿った和紙を切らさないことにあった。撚糸機の最適なロール回転速度や張力を探り、和紙の結束を強める溶液の配合試験を繰り返した。乾燥を防ぎ湿り気を一定に保つため、ロール収納部をふたで覆う工夫も編み出した。

製法実用化から一年後の〇五年冬、東京都内での繊維見本市に出展。アパレルメーカーや商社の強い関心を引いた。地元デニムメーカーと協力した和紙糸を織り込んだ新素材の商品展開が、間近に迫る。

（小島正和）

幅約20メートルの撚糸機が絶え間なく稼働する工場。綿糸や和紙をより合わせて強度を高める

《会社概要》

1927年、光成猛社長のおじの故光成源一氏が福山市芦田町で撚糸業を始めた。43年から現社名。45年、同町内の現在地に移転、63年には株式会社化した。従業員20人。資本金2500万円。2006年3月期の売上高は1億8000万円。07年は2億円を見込む。

http://www.binnen.co.jp

トップから

社業の柱に育てたい

光成猛社長（64）

和紙糸は地中で溶解しやすく、焼却しても有害ではない。環境保全の機運が高まる中で、市場の広がりの可能性を秘めた商品だと考える。衣類や日用品への活用、他の素材との組み合わせなど、アイデアが尽きない。顧客から逆に用途の提案を受けることもある。長年の受託加工で受け身の姿勢が続いてきたが、ようやく自分で価格を決められる仕事を得た。異業種との連携を強めて、将来は和紙糸を社業の柱に育てたい。低迷ムードの続く撚糸業界の励みにもつながるはずだ。